



CATALER

株式会社キャタラー
【本社】掛川市千浜7800番地
【設立】1967年5月8日

「空気をきれいに」挑戦続け50年 触媒・活性炭で 掛川から世界へ



掛川・新茶マラソンでは、社員がボランティアスタッフとして、ランナーにフルーツを振る舞った
国道150号に設置された看板と社員による清掃

「まち一番の企業に」地域貢献にも注力

同社は、設立4年後の1971年以来、40年超にわたって掛川市を拠点に事業を展開してきました。「まちで一番愛される企業になりたい」(砂川社長)との思いから、掛川・新茶マラソンなど、地元のイベントへの協賛や、県や市と締結した「しずおかアダプトロードプログラム」に基づく本社北側の国道150号の清掃活動、年1回の夏祭りなどで、地元との交流を続けています。

砂川社長は「会社が守られているのは、地元にも昔から暮らしていた人たちのお陰」と語ります。県の第4次地震被害想定は、巨大地震が発生した場合、最大約13%の津波が押し寄せる可能性があるとしています。一方、南側に2つの防砂林がある同社への津波による浸水被害は、1%程度と予測されています。この防砂林は、もともと地元の住民が作ったものだといわれ、その恩恵にあずかる同社は「恩返しをしたい」と、市と協定を結び周辺の高台に階段を整備して避難所にしたたり、市の津波対策基金への第1号となる寄付をしつめています。

本年からは、新入社員研修の一環として、近隣の介護施設でのボランティア活動もスタートしました。「新入社員には、幅広い人との関わり方を学んでほしい」と砂川社長は狙いを語ります。



◎大島司(掛川市ふるさと親善大使)
企業ボスターなどに地元出身の漫画家・大島さんが描いたイラストを使用



砂川博明 社長 59



掛川市のキャタラー本社

自動車の触媒や活性炭の開発・製造を手掛けるキャタラー(本社・掛川市)はことし5月、設立から50周年の節目を迎えました。砂川博明社長に、同社の取り組みや展望について聞きました。

(企画・制作/静岡新聞社営業局)



地球環境の保全・改善 当社の使命

厳しい規制 技術革新でクリア

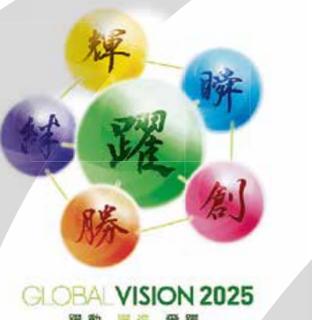
当社が設立された1967年は、くしくもトヨタグループの祖である豊田佐吉氏の生誕100周年の年でした。当社の草創期にあたる60年代から70年代は、高度経済成長に伴う大気汚染が深刻化していた時代です。自動車の排ガスへの社会の目は厳しさを増していましたが、炭化水素や一酸化炭素、窒素酸化物を、コストを抑えつつ効率的に無害化する方法はまだ確立していませんでした。

こうした時代背景の中で創業した先人の苦労は大変なものでしたが、触媒とともに歩み、年々厳しくなる規制を技術革新でクリアして自動車業界の一角を支えながら会社を成長させてきました。

【表】キャタラーの主な全社的取り組み

C-QIC (Cataler - Quality Innovation Challenge)
全業務を対象として、「業務の標準化」と「問題の再発防止」を軸に仕事の仕組みを継続的に改善していく活動

C-BCM (Cataler - Business Continuity Management)
自然災害などさまざまなリスクに対応できる体制を構築して顧客からの信頼を高め、従業員や家族が安心して働ける環境づくりを推進する活動



自動車の製造に欠かせない部品を生産する当社が供給をストップさせてしまうと、多くの企業、ひいては社会全体に影響を及ぼしてしまいます。海陸空に立地する当社は、防潮堤や地震を感じし閉まる水門などを設置して建屋への浸水を防ぎ、社員と製造拠点を守る体制を整えています。また、どこかの拠点を生産できない状態になっても他の拠点から部品を供給できるバックアップ体制を確立しています。

当社の取り組みを第三者の視点で評価していただくため、事業継続に関する認証「ISO22301」も取得しました。定期的な外部からの監査を受けることで、緊張感を保ち続けたいと考えています。

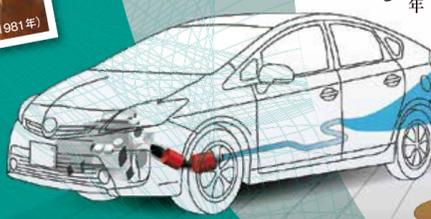
「持続的成功」で10年後も成長

近年、環境意識の高まりから先進国の排ガス規制はより厳しくなり、対応には高い技術力が求められます。有害ガスを触媒で浄化するだけでなく、微粒子の排出も抑えなければならぬため、触媒とフィルターを組み合わせた製品を開発し、別にフィルターを付ける場合よりも、搭載スペースやコストの減少を図っています。

一方、自動車のニーズが高まる発展途上国では、できるだけコストを抑えることが肝心です。そこで、生産設備を現地の空き倉庫などで稼働できるサイズにコンパクト化し、すぐに生産開始、撤収できる機動力のあるシステムづくりの研究を進めています。

自動車の電動化は、当社に大きな環境の変化を迫ることになります。ガソリンやディーゼルエンジン用の触媒の先進国での需要は、これまで以上に伸びないことが見込まれますから、将来に向けて、新たな柱となる事業も作らなくてはなりません。

そこで当社は昨年、10年後を見据えた取り組みとして、「VISION2025」を制定しました。「躍」という文字をシンボルに、「事業成長」「ものづくり革新」「グローバルアクティビティ」の3つの柱を掲げ、事業を推進していきます。



自動車への搭載イメージ



自動車用の触媒

キャタラーの歴史

- 1967年 5月 袋井市の第一炭素工業内にキャタラー工業設立
- 71年 4月 本社を現在の掛川市千浜に移転
- 73年 1月 トヨタ自動車工業から「自動車用触媒に関する研究開発」業務を受託
- 81年 12月 第一炭素工業を吸収合併
- 96年 8月 タイにキャタラータイランド(CTO)設立
- 97年 9月 ISO9001(日本のみ)、QS-9000認証取得
- 98年 6月 株式会社キャタラーに社名変更
- 99年 10月 ISO14001認証取得
- 2001年 1月 南アフリカにキャタラーサウスアフリカ(CSA)、米国にキャタラーノースアメリカ(CNA)設立
- 02年 12月 中国に科特(無錫)汽車環境保科技公司(CCC)設立
- 05年 12月 TS16949認証取得
- 11年 10月 インドネシアにキャタラーインドネシア(CIC)設立
- 12年 3月 掛川市と津波避難施設使用協定を締結
- 14年 3月 インドにキャタラーインド(CIN)を設立
- 4月 アーククリエーションセンター建設のため、磐田市下野部に用地取得
- 10月 10月 ISO22301認証を取得
- 15年 10月 デミング賞受賞

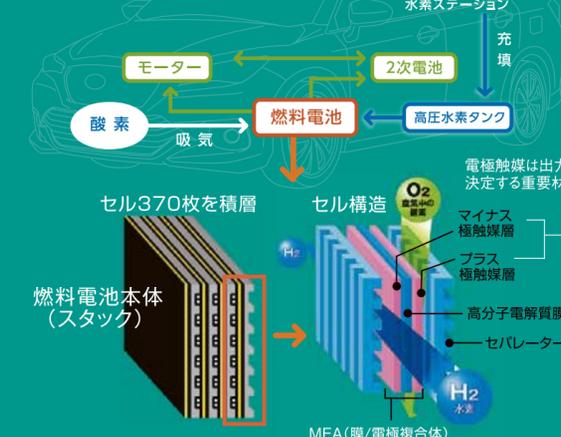


第一炭素との合併調印式(1981年)



デミング賞のメダル

FCV Fuel Cell Vehicles 燃料電池自動車



燃料電池車欠かせぬ触媒 自動車の「電動化」に対応

これまで培った触媒や活性炭製造の技術を生かし、同社は燃料電池車など、自動車の「電動化」に対応する製品の開発にも力を入れています。燃料の水素と大気中の酸素を反応させて電気を生み、モーターを回して走行する燃料電池車向けに、発電の効率を上げる電極触媒を開発。トヨタ自動車の「MIRAI」に搭載されています。また、レーシングカーなどで使われている蓄電池「キャパシタ」用炭素材の開発も進めています。キャパシタは急速な充放電が可能で、風力発電設備や人工衛星をはじめ、さまざまな分野への可能性があり、今後ニーズが高まることが予想されます。同社では、充放電の早さや蓄電量をさらに向上させる研究を進めています。

技術磨く拠点に アーククリエーションセンター稼働へ



ことし秋、磐田市での稼働を予定している「アーククリエーションセンター」

同社はことし秋、磐田市下野部工業団地で、新たな研究開発拠点「アーククリエーションセンター」の稼働を予定しています。センターは免震設計の4階建てで、研究棟や試験棟、実験棟を設け、延べ床面積は約2万5千平方メートルです。完成後、研究開発本部の約300人が段階的にセンターに移る計画を立てています。技術者同士がノウハウを共有することで開発の効率を上げたり、部署間の垣根をなくしたりするため、会議室以外にも、社員同士がコミュニケーションできるスペースを随所に設けています。研究室は取引先企業と「共同開発」を進めやすい設計とする一方、同社と共同開発先の技術情報を漏えいから守るセキュリティの両面も図りました。砂川社長は「震災への対応力を強化するとともに、当社の武器である技術を磨く場として、センターを育てていきたい」と意気込んでいます。